

2019年5月28日

シリーズ企画「北米、飛躍する起業都市」

【第4回】ロサンゼルスにシリコンビーチ出現

サンタモニカに起業の風、モビリティ関連も注目

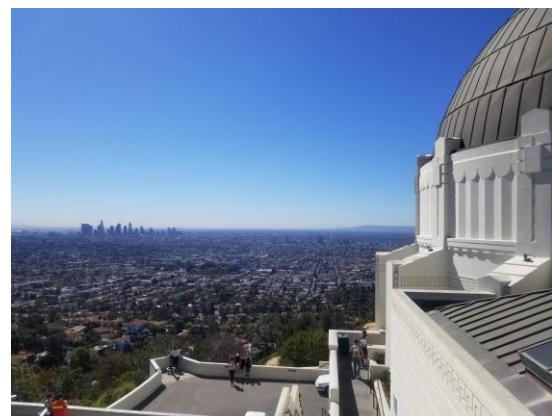
主任研究員 上原正詩

(要旨)

- ▶ ロサンゼルスはベイエリア、ニューヨークに次ぐユニコーン企業数を誇るスタートアップ都市だ。西のサンタモニカを中心とする「シリコンビーチ」にスタートアップ生態系が形成されつつある。
- ▶ 「シリコンビーチ」には米国有数のアクセラレーターがある。マッカーラボとアンプリファイ LA だ。インキュベーター型のサイエンスもユニコーンを生み出している。
- ▶ カリフォルニア工科大学（カルテック）のあるパサデナにも、歴史のあるインキュベーター、アイデアラボがある。新エネルギー分野にも投資しているのが特徴だ。
- ▶ ロサンゼルスにはモビリティ（移動）関連のスタートアップも数多く集積している。2028年のロサンゼルス五輪に向けて、新エネルギーとモビリティ関連ビジネスが盛り上がる可能性がある。

ロサンゼルスの人口は 1329 万人でニューヨーク（1998 万人）に次ぐ全米第 2 位の都市圏（写真 1）。サンフランシスコの 2.8 倍の規模がある¹。経済規模ではニューヨークの 6 割でやはり全米第 2 位、サンフランシスコと比べると 2 倍の差を付けている。この巨大な経済圏から生まれたユニコーンは、5 月にナスダックに上場したばかりの人工肉メーカー、ビヨンド・ミートを含めると 15 社ある（5 月 27 日現在、図表 1）。108 社のユニコーン

写真 1 ロサンゼルス全景
（グリフィス天文台より）

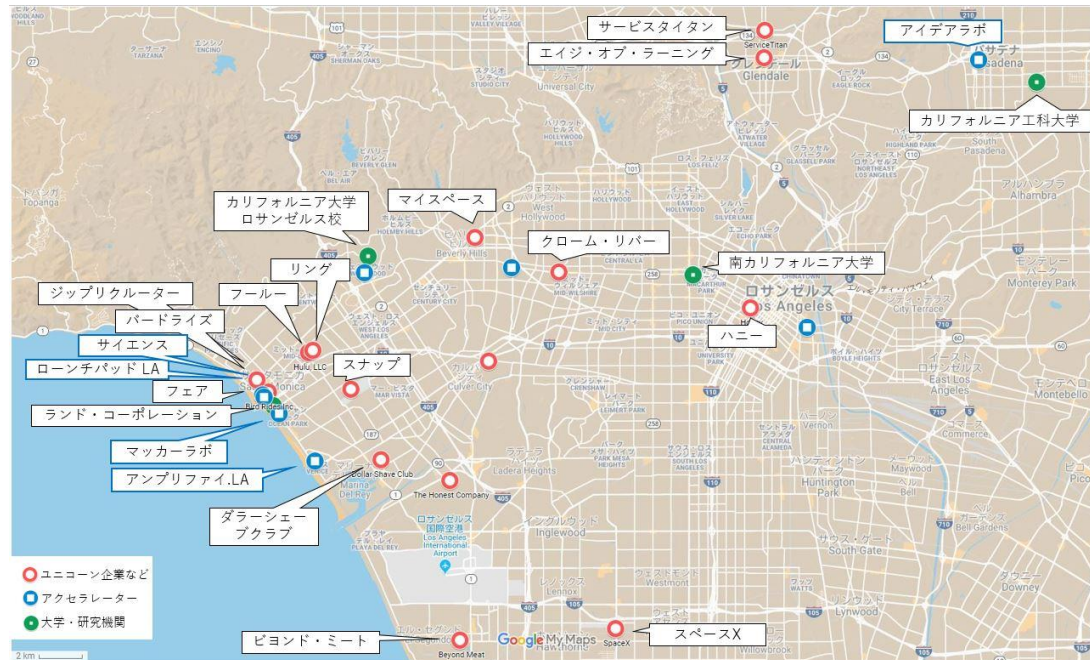


¹ ロサンゼルスーロングビーチーアナハイム都市圏、2018 年推計

https://factfinder.census.gov/faces/tableservices/jsf/pages/productview.xhtml?pid=PEP_2018_PEPANNRES&prodType=table

が集まるサンフランシスコと比べると見劣りし、その所在地も広大なロサンゼルス首都圏内で分散しているが、ニューヨークに続くスタートアップ都市となっている。ボストンよりも多くのユニコーンを抱えている²。

図表1 ロサンゼルスユニコーン企業、アクセラレーターなどの分布



(グーグルマップで作成)

図表2 シリコンビーチの位置 (ロサンゼルス市の鳥瞰図)

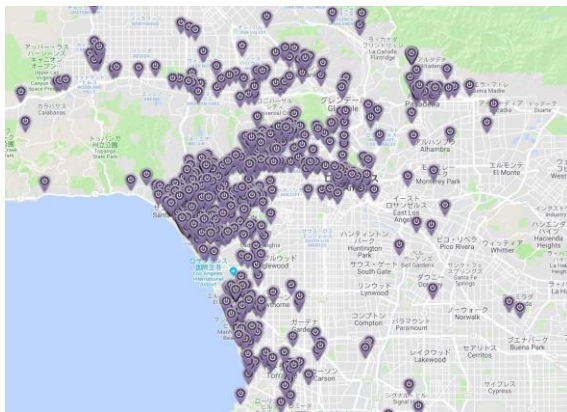


(グーグルアースで作成)

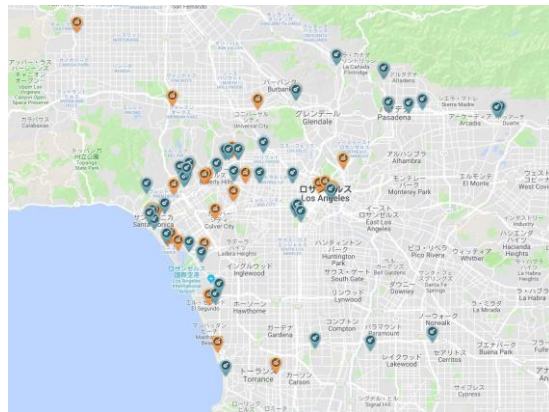
² 上原正詩 (2019)、シリーズ企画「北米、飛躍する起業都市」 【第1回】 突出するベイエリア、ユニコーン6割集中—背後にアクセラレーター、「Yコンビネーター」、日本経済研究センター、2019年5月 図表5、6 参照

<https://www.jcer.or.jp/research-report/2019059.html>

図表3 スタートアップ分布



図表4 アクセラレーター分布



(資料) リプレゼント LA

非営利団体リプレゼント LA が作成しているスタートアップ関連企業の分布を見てみると、ロサンゼルス市の西側に重心が偏っていることが分かる(図表3、4)³。ハリウッドからビバリーヒルズを通ってサンタモニカに通じる国道2号線、ロサンゼルス国際空港からサンタモニカに抜ける国道1号線沿いに多くのスタートアップやインキュベーター／アクセラレーターが集積している様子が見えてくる。サンタモニカを中心にビーチ沿いに広がる地域は「シリコンビーチ」などと呼ばれ、近年ロサンゼルス市のスタートアップ・ハブとして注目を集めている場所だ(図表2)⁴。

■ 開放的なサンタモニカ

ロサンゼルス国際空港から約10キロメートル、タクシーで15分のところにあるサンタモニカは、太平洋に面する開放的なビーチ・リゾートタウンだ(写真2、3)。ロスのダウンタウンはここから東に約25キロメートル、メトロで約1時間の距離がある。ロサンゼルス大都市圏のスタートアップ経済の中心は、多くのホームレスが徘徊するダウンタウンではなく、陽光を求めてリッチな観光客があふれるサンタモニカにある。サンタモニカからベニスにかけてのビーチ周辺が「シリコンビーチ」の中心で、ロサンゼルス空港に向かう途中にあるプラヤ・ビスタにもユーチューブ、フェイスブックなどがオフィスを設け、テック人材が集まってきている⁵。

ロサンゼルスはハリウッドなど映画産業を抱えているだけに、シリコンビーチ

³ <https://represent.la/>

⁴ Forbes, Sep 14, 2012, “Defining Silicon Beach”
<https://www.forbes.com/sites/lorikozlowski/2012/09/14/defining-silicon-beach/#3805611f6442>

⁵ 日本貿易振興機構(ジェトロ)、ビジネス短信、2011年12月27日、「ITベンチャーがロサンゼルスに集積—『シリコン・ビーチ』の呼び名が定着—」

ジェトロ・ロサンゼルス事務所(2018)、「2017年度日本発知的財産活用 ビジネス化支援事業エコシステム調査～ロサンゼルス編～」、2018年3月

https://www.jetro.go.jp/ext_images/_Reports/02/2018/9feb695ba69371d7/report-la.pdf

にはエンターテインメント関連企業も多い。テレビ局大手の共同事業として始まり、このほど米ウォルト・ディズニーが完全子会社化することになった動画配信サービス大手フルーヤ、10秒間だけ写真・動画をアップロードできるソーシャルメディア「スナップチャット」を運営するスナップなどの知名度が高い。女優ジェシカ・アルバが創業した自然に優しい日用品ブランドのオネスト・カンパニーもサンタモニカ発だ（一時ユニコーン企業だった）⁶。

家の中に居なくても、訪問客の姿をスマホで見ることができる「ビデオドアベル」を開発し、アマゾンに2018年に買収されたリングといった企業もある。ユニコーン企業では求人サイトのジップリクルーター、中古車の定額制レンタルサービスを手掛け、ソフトバンクが投資したフェア、そして電動キックスクーターのシェアサービスのバードライズの3社がシリコンビーチにある。

スタートアップ生態系には欠かせないアクセラレーター、インキュベーター、そしてベンチャーキャピタル（VC）もシリコンビーチにある。アクセラレーターではライス大学などの大学の研究者が作成している「アクセラレーター・ランキング・プロジェクト」でトップ7に入ったアクセラレーター2社がここにある⁷。マッカーラボ（マッカーキャピタル）とアンプリファイ LA だ。サイエンス、ローンチパッド LA といったインキュベーター兼アクセラレーターもある。ロサンゼルス有数の VC、アップフロント・ベンチャーズの本社も繁華街の中にある。アクセラレーターの集積ではバイエリア、ニューヨークに次ぐ規模を誇る⁸。

写真2 サンタモニカの海岸

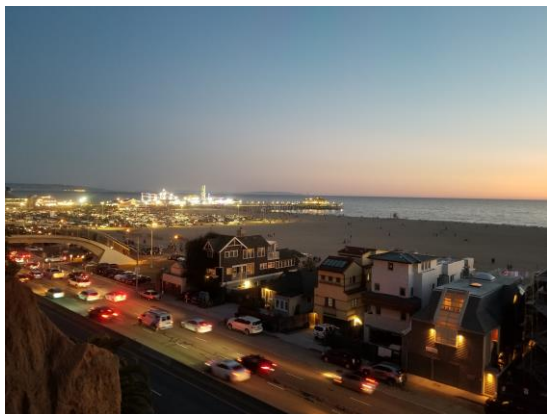


写真3 サンタモニカ・ピア（ルート66）



⁶ Wall Street Journal, May 15, 2019, “Hulu Deal Has a Real Hollywood Ending for Disney, Comcast”

<https://www.wsj.com/articles/hulu-deal-has-a-real-hollywood-ending-for-disney-comcast-11557848472>

⁷ <http://seedrankings.com/>

⁸ 上原正詩（2019）、シリーズ企画「北米、飛躍する起業都市」 【第2回】バイエリア、サンフランシスコに重心移動 アクセラレーター、差別化競う、日本経済研究センター、2019年5月、 図表5、6参照

<https://www.jcer.or.jp/research-report/20190516-2.html>

■ シリコンバレーをロサンゼルスに再現、マッカーラボ

マッカーラボは旧国道「ルート 66」の西の起点「サンタモニカ・ピア」から歩いて 15 分の閑静な住宅地の中にあった（写真 4）。マッカーラボはシリコンバレーのスタートアップ生態系をロサンゼルスに再現すべく、サンフランシスコのハリソンメタルでスタートアップ投資を手掛けていたエリック・ランナラ氏と、商業施設向けの入札管理ソフト会社を起業・売却した経験を持つウィリアム・スー氏（ともに共同創業者兼マネージングパートナー）が 2011 年に設立した。

マッカーラボは毎年 10-12 社を 1 年かけてじっくりと育てていく。7-12% の株式と引き換えに 2 万 1000-15 万ドルを投資する。短期集中指導の Y コンビネーター（YC）などと異なり、投資家向けのデモデーも開催しない。「アンチ YC」のエンジェルパッドと考え方は似ている。「マッカー」とは発明家トーマス・エジソンがいっしょに働いた研究者たちを呼んだ言葉だ。エジソンは研究開発に特化した「研究所」を発明したことでも知られ、自らのアイデアを実際に製品化して確かめるのにマッカーたちを活用していた。エジソンの下で鍛えられたマッカーたちは自らも発明家として育っていったという。

マッカーラボはすでに 100 社近くのスタートアップに出資しており、ユニコーンも 1 社含まれている。サービスタイタン（カリフォルニア州グレンデール）の評価額は 16 億 5000 万ドルで、住宅サービス業者向けに空調、配管、電気設備などの技術者の派遣、スケジュール管理、受発注などのソフトをワンストップで提供している。マッカーラボによれば、ハニー（ロサンゼルス）もユニコーン企業になったという。様々な電子商取引サイトのクーポンを検索できるアプリを開発・運営する。ほかにタキシードのオンライン・レンタルサービスのブラックタックス（サンタモニカ）、生け花のネット通販サイトのブルームネーション（同）、即日配送サービスのドロップオフ（テキサス州オースティン）など電子商取引関連のソフト開発スタートアップを数多く支援している。

アンプリファイ LA はサンタモニカに隣接するベニスにある（写真 5）。アンプリファイはマッカーと同じく 2011 年設立で、VC のグレイクロフトのパートナー、ポール・ブリコー氏と自動車価格情報サイト「トゥルーカー」を最高技術責任者（CTO）として立ち上げたオーデッド・ノイ氏が共同創業者兼マネージングパートナーとなっている。ユニコーン企業はまだ生まれていないが、出資する 70 社近くのスタートアップの中には、所持品を自宅とは別の場所に保管してくれるサービスのクラッター（カルバーシティ）や、パソコンや情報機器の設置・設定ができる技術スタッフを家庭に派遣するハローテック（ロサンゼルス）などがある。

サンタモニカの中心街にあるサイエンスは、マイケル・ジョーンズ氏がピーター・ファム氏らと 2011 年に設立した（写真 6）。ジョーンズ氏はチャットサービ

写真 4 マッカーラボ



スのユーザーブレン（サンタモニカ）を創業し AOL に売却したり、フェイスブックのライバルだったマイスペース（ビバリーヒルズ）の最高経営責任者（CEO）を務めたりした後、サイエンスを創業し CEO に就任した。ファム氏は写真共有サイトのフォトバケットを創業し、マイスペースに売却した起業家だ。サイエンスはインキュベーター型のスタートアップ支援組織で、「スタートアップスタジオ」という「同時多発的に複数の企業を立ち上げる組織」に分類される⁹。ハリウッドの映画会社は映画監督の下、社内外のスタッフを動員して作品を次から次へと生み出していくが、スタートアップスタジオもアイデアをスタートアップという形で内部から生み出していく。既存の外部のスタートアップを経営指導し、出資もするというアクセラレーターとは異なるビジネスモデルだ。

サイエンスは 90 社近くに出資しており、そのうち最も成功したスタートアップがダラーシェイブクラブ（マリーナ・デルレイ）。マイケル・ダブリン共同創業者兼 CEO が 2011 年に設立。すぐにサイエンスのプログラムに参加し、10 万ドルのシード資金を受け取った。髭剃りセット一式（替え刃、クリームなど）を定期的に届けるサービスで、2016 年に英蘭ユニリーバが 10 億ドルで買収した。米プロクター・アンド・ギャンブル（P&G）の「ジレット」と、米エッジウェル・パーソナルケアの「シック」が 2 分する市場にユニリーバが新規参入する形となった。

写真 5 アンプリファイ LA



写真 6 サイエンス



■カルテック城下町パサデナにアイデアラボ

シリコンビーチだけではない。ロサンゼルス中心部から北西に約 20 キロメートル。メトロで 1 時間ほどのところにあるパサデナ。ここに QS 大学ランキングで、スタンフォード大学、マサチューセッツ工科大学、ハーバード大学に次いで世界第 4 位の評価を誇る大学がある（写真 7）¹⁰。カルテックことカリフォルニア工科大学だ。キャンパスは静謐な趣きで、僧院のような雰囲気醸し出している。巨大な建物が林立するスタンフォード大や UC バークレー校のような威圧感はない。1 万 1000 人の MIT、1 万 6000 人のスタンフォード大、4500 人のハーバード大

⁹ アッティラ・シグティ（2017）、「STARTUP STUDIO 連続してイノベーションを生む『ハリウッド型』プロ集団」、日経 BP 社

¹⁰ <https://www.topuniversities.com/university-rankings>

に比べると、少数精鋭の 2200 人強の学生が学んでいる。カルテックはスタンフォード大のように数多くの起業家を輩出しているというイメージはないが、優秀な理工系人材は政府や大企業の研究所、そしてスタートアップへの人材供給基地となっているとみられる。米航空宇宙局（NASA）が所有するジェット推進研究所もパサデナにあるが、もともと同研究所はカルテックの一部だった。

このカルテックから西に約 4 キロメートル、パサデナの市街地にアイデアラボがある（写真 8）。ビル・グロス共同創業者兼会長が 1996 年に設立し、インキュベーターというビジネスの概念を広めたとされる¹¹。YC の設立よりも 10 年以上も前にスタートアップ育成ビジネスを始めた、歴史あるインキュベーターだ。カルテックを 1981 年に卒業したグロス氏は GNP ディベロップメントを創業し、表計算ソフト「ロータス 123」を使いやすくするソフトを開発。同社をロータス・ディベロップメントに 1985 年に売却した¹²。その後は複数の企業を立ち上げては売却。中でも検索連動型広告のオーバーチュア・サービシズ（旧ゴートゥー・ドット・コム）はグーグルの広告ビジネスの原型とも言われ、米ヤフーが買収した。

写真 7 カルテック



写真 8 アイデアラボ



アイデアラボも「スタートアップスタジオ」に分類され、ビル・グロス氏が提案するアイデアを社内スタッフがビジネス化し、うまく行けばスタートアップとして切り出していく。現在ではコインベース、サンタモニカのフェアなどユニコーン企業も含めて 150 社以上に出資する（図表 5）。IT だけでなく、エネルギー関連のスタートアップにも投資しているのが特徴だ。これはグロス氏自身、高校生の時に創業した企業が太陽電池関連で、クリーンエネルギーに強い関心を持っているためだ。自ら発案した太陽光集光発電のエディスン・マイクログリッド（パサデナ）、エネルギー貯蔵技術のエナジー・ボルト（スイス・ルガーノ）などがある。アイデアラボとは関係ないが、ロサンゼルスにはユニコーン企業の 1 社と

¹¹ Wired、2002 年 7 月 30 日、「アイデアラボ社グロス CEO に訊く：『ネット企業は終わらない』（上）」

<https://wired.jp/2002/07/30/%E3%82%A2%E3%82%A4%E3%83%87%E3%82%A3%E3%82%A2%E3%83%A9%E3%83%9C%E7%A4%BE%E3%82%B0%E3%83%AD%E3%82%B9ceo%E3%81%AB%E8%A8%8A%E3%81%8F%EF%BC%9A%E3%80%8C%E3%83%8D%E3%83%83%E3%83%88%E4%BC%81%E6%A5%AD/>

¹² https://www.idealab.com/bio/board/bill_gross.php

して、アーバイン近郊のランチョ・サンタ・マルガリータに核融合エネルギーを研究する TAE エネルギー（旧トライアルファエナジー）がある。エネルギー関連スタートアップの集積は、IT に偏ったベイエリアとの差別化につながりそうだ。

図表 5 ロサンゼルスにある 4 アクセラレーター／インキュベーター比較

基本情報				
企業名	マッカーラボ	アンプリファイ.LA	サイエンス	アイデアラボ
本社所在地	サンタモニカ	ベニス	サンタモニカ	パサデナ
設立年	2011	2011	2011	1996
従業員			15(2014 年は150)	101 (2015年は344)
合計投資企業数	102	96	90	189
出口企業数	19	20	28	105
運用資金額(百万ドル)	121.8	25.8	107.8	
投資分野				
IT	66.7%	56.3%	52.2%	48.9%
BtoC	19.6%	26.0%	35.6%	21.2%
BtoB	9.8%	10.4%	8.9%	14.1%
ヘルスケア	1.0%	4.2%		
金融サービス	2.9%	3.1%	3.3%	4.3%
エネルギー				10.9%
資源				0.5%
国別投資数				
米国	99.0%	95.8%	93.3%	94.9%
アジア・中東			1.1%	2.2%
欧州			1.1%	2.8%
それ以外	1.0%	4.2%	6.7%	5.1%
主な投資企業				
	サービスタイトン	クラッター	ダラーシェーブクラブ	ペイパル
	ハニー		バードライズ	コインベース
			ローバー	オーバーチュア・サービス
			グローブ・コラボレーション	トウィリオ
			メディアム・コーポレーション	フェア
			ウェルスフロント	インターネット・ブランズ
				イーベイ・コマース

(資料) PitchBook、5月22日現在

■ 電動スクーターのシェアサービスが注目

ロサンゼルス生態系の特徴のひとつはモビリティ（移動）関連の企業が多いことだ。最も注目されているのが電動スクーター（椅子がなく、キックスケーターにハンドルがついた L 字型のスクーター）のシェアサービスだ。

ユニコーンの 1 社、バードライズもサンタモニカに本社があり、シリコンビーチを代表するスタートアップだ。サンタモニカの街中や海岸沿いの道路に電動スクーターで疾走する若者や観光客をよく見かける（写真 9）。アプリで近くのスクーターを探し、ハンドルにある QR コードを読み込むと解錠できる仕組み（写真 10）。スタート時に 1 ドル、さらに 1 分毎に 0.15 ドルの料金がかかる。どこにで

も乗り捨ててよく、充電ドックに返却する必要がないため「ドックレス・モビリティ・システム」と呼称されている。シリコンビーチを西のサンタモニカから、東のプラヤ・ビスタまで約 17 キロメートル乗ってみたところ、プラヤ・ビスタに着いた時点でバッテリーが切れた。時間にして 1 時間半、料金は約 24 ドルだった。

バードライズは配車サービスのリフト最高執行責任者（COO）やウーバーの副社長を経験したことのあるトラビス・バンダーザンデン氏が、ゴールドクレスト・キャピタル（テキサス州ダラス）からシード資金を得て 2017 年に設立した。設立後わずか 1 年でセコイア・キャピタルやアクセル・パートナーズなど大手 VC から資金を調達してユニコーン企業になった。

バードライズにはサイエンスも出資している。バードライズはポートランド、デトロイト、オースティンなど米国内のみならず、ウィーン、パリ、テルアビブなど世界 100 前後の都市へとサービスを急拡大中だ。サイエンスはバードライズのほか、同様のサービスをメキシコで展開するグリーン・スクーター（メキシコシティ）にも出資する（グリーンは VC 卒業生）。グリーンは 19 年 1 月、ブラジルの同業イエローと合併してグロウ・モビリティに名称を変更すると発表している。

自動車で行くには近く歩くには遠い「ラスト・ワン・マイル」の移動を巡って、西海岸では激しい戦いが繰り広げられている。サンタモニカでバードライズと争うのはライム（サンマテオ）と「ジャンプ・バイクス」（ソーシャル・バイシクルズ、ニューヨーク州バッファロー）など。ライムもジャンプも自転車シェアサービスから始まったが、自転車を電動スクーターに順次置き換えている。自転車や電動スクーターなど「マイクロ・モビリティ」とも呼ばれる分野で、世界中の都市で様々な企業が VC の資金的なバックアップを受けてサービスを拡大中だ。

米国でタクシー配車サービス市場を 2 分するウーバーとリフトはドックレス・モビリティ市場にも相次ぎ参入している。ウーバーは「ジャンプ・バイクス」を 2018 年 4 月に、リフトはモティベート・インターナショナル（ニューヨーク州ブルックリン）を 2018 年 7 月に買収した。また米フォード・モーターも 2016 年設立のスピン（サンフランシスコ）を 2018 年 11 月に買収するなど大手がこぞって「ラスト・ワン・マイル」に触手を伸ばしている。

写真 9 ライム（手前）やリフト（2、3 番手）に乗る観光客



写真 10 バードの電動スクーター（スマホで QR コードを読み取る）



■都市間モビリティや宇宙も

電動スクーターのように渋滞緩和、大気汚染防止につながる都市のモビリティを提案するスタートアップだけでなく、都市と都市の間の新しいモビリティ、さらには地球と宇宙の間のモビリティを追及するスタートアップもある。

中心人物は電気自動車メーカーのテスラ（パロアルト）を 2003 年に創業したイーロン・マスク氏だ。マスク氏は減圧された密閉チューブの中を列車が浮上して高速移動する大量輸送システム「ハイパーループ」の構想を 2013 年に発表し、現在の地下鉄や鉄道を代替する交通手段として提案した¹³。それを実現しようと名乗りを上げたのが、ハイパーループ・トランスポート・テクノロジー（HTT）とハイパーループ・ワンの 2 社。HTT はロサンゼルスとサンタモニカの間にあるカルバーシティに、ハイパーループ・ワンはロサンゼルス中心部に本社を置く（写真 11）。ハイパーループ・ワンには英ヴァージングループが 2017 年に出資し、名前も「ヴァージン・ハイパーループ・ワン」となった。マスク氏自身は地下トンネルを掘るボーリング・カンパニーを設立し、創業者兼 CEO として経営しているが、本社はシリコンバレーとサンフランシスコの間にあるバーリングゲームにある。

宇宙への移動手段の開発にもマスク氏は着手している。マスク氏は火星への移住手段としてロケット・ビジネスに関心を持っており、宇宙開発スタートアップのスペース・エクスプロレーション・テクノロジーズ（スペース X）をシリコンビーチの少し南、ホーソーンに 2002 年に創業している（写真 12）。ニュージーランド出身のピーター・ベック氏が 2006 年に創業したロケット・ラボは小型衛星を安価に打ち上げられる小型ロケットを開発中で、ロサンゼルス中心部から約 50 キロメートル離れたハンチントン・ビーチに本社を置く。スペース X もロケット・ラボもともにユニコーン企業だ。

ロサンゼルスには 1910-30 年にかけて、ロッキード（現ロッキード・マーティン）、ダグラス・エアクラフト（現ボーイング）、ノースロップ（現ノースロップ・グラマン）、ヒューズ・エアクラフトなど米国の有力航空機メーカーが軒並み工場を建設した¹⁴。第二次世界大戦を経て、航空機産業の一大集積地となった。宇宙工学、機械に関連する人材がカルテックで育成され、ジェット推進研究所などでも採用された。こうした人材の蓄積がスペース X やロケット・ラボなどのモビリティ系スタートアップが集積する誘因になっている。「シリコンバレー」の一角、プラヤ・ビスタはヒューズ・エアクラフトがかつて本社を置いていた場所だ。冷戦が終わり航空機産業は衰退したが、新産業が芽吹きつつある。

写真 11 ヴァージン・ハイパーループ・ワンの本社



¹³ アシュリー・パンス（2015）「イーロン・マスク 未来を創る男」、講談社

¹⁴ Hughes Industrial Historic District, Southern California Aerospace Industry <http://www.hugheshistoricdistrict.com/southern-california-aerospace-industry/>

2020年の東京、2024年のパリに続いて、ロサンゼルスは2028年に五輪を開催することが決まっている。「五輪に向けて交通インフラへの大型投資が期待される。ロサンゼルスにはビジネスチャンスが広がっている」とジェトロ・ロサンゼルス事務所の金指壽次長は語る。ロサンゼルスの交通渋滞緩和、温暖化ガス削減に向けて、モビリティの改善、再生可能エネルギーの導入などを通じてスマートシティ化が進む見通し。ウーバーテクノロジーも「空飛ぶタクシー（ウーバーエア）」のサービスをロサンゼルスーダラスの間に2023年に商業化する計画を明らかにしている（写真13）。ロサンゼルスにおけるモビリティ分野の動きは目が離せない。

写真12 スペースXのロケット



(©Space Exploration Technologies)

写真13 ウーバーエアのポート



(©Uber Technologies)

「起業家と大学、VCの溝を埋める」、ロスに生態系を作るマッカーラボ

ベイエリアに比べるとロサンゼルススタートアップ生態系はまだ発展途上にある。マッカーラボは生態系を作るべくロサンゼルスでアクセラレーターを立ち上げた。創業から8年経ち、米国を代表するアクセラレーターの1つとなった。サンタモニカを「シリコンビーチ」にした立役者の一人、ウィリアム・スー共同創業者兼マネージングパートナーに米国のスタートアップ経済について聞いた。

――米国は日本に比べるとスタートアップ経済が盛んだ。

「スタートアップ・カルチャーを育めるかどうかはメディアの責任が大きいと思う。私は10歳の時に台湾から米国に移ったが、当時、子供たちのヒーローはマイケル・ジョーダンなどバスケットボールの選手、あるいはほかのスポーツ選手だった。メディアがスターを作り、子供たちはみんなそうなりたと思ってスポーツに熱中した。1990年代後半になって米国のヒーローはビジネス起業家になった。私が高校生、大学生の時はインテルのトップ、アンディ・グローブがヒーローだった。探検家や宇宙飛行士がヒーローだった時代もあるが、今はラリー・ペイジやマーク・ザッカーバーグなど起業家に人々があこがれる時代だ」

――アクセラレーターが果たす役割も大きい。

「アクセラレーターは大学と起業のギャップを埋める存在だ。大学はプログラミングの基本的な考え方など基礎を教えるところだ。しかし起業の仕方、すなわちエンジニアを見つけて束ね、財務・経理をやりくりするといったことは教えてくれない。アクセラレーターがある今、もはや起業にブラックボックスは存在しない。起業に必要なことは『知識とスキル』だが、それは半分に過ぎない。私は残り半分は純粋に文化的、心理的なものであると考えている。アクセラレーターに来れば、自分は一人でないと感じるができる。それは家族であり、アパートで一人会社を始めるのとは違う環境を提供する」

「アクセラレーターはほんの10年ほど前、2007年にYCによって発明された。米国でも新しい概念だった。その前はVCが起業家を支援していたし、もっと前は大企業からのスピノフが起業のパターンだった。アンディ・グローブもインテルを創業する前はフェアチャイルドセミコンダクターで働いていた。それがインターネットの登場ですべてが変わった。インターネットという新しいルールは25歳も45歳も関係ない。年齢の上の人が競争上の優位性を持っている時代ではなくなった。25歳の方が消費者のことをよく理解しているかもしれない。VCと若い起業家の間にはギャップがあり、YCはそのギャップを埋めた。VCの資本を若い起業家につなげる役目だ。今や米国には500以上のアクセラレーターがあり、その10%は驚くべき成果を上げている」



マッカーラボのウィリアム・スー共同創業者兼マネージングパートナー

――ロサンゼルスでアクセラレーターを始めたのはなぜか。

「私はシリコンバレーで起業し、22歳の時に5000万ドルで売却したことがある。パートナーのエリックもシリコンバレーで働いており、その生態系がどう機能しているか知っていた。私は仕事のためにロサンゼルスに移り、ある時エリックがベンチャーファンドを立ち上げようと持ち掛けてきた。ロサンゼルスの生態系を見ると、起業したいという人は大勢いた。しかしVCと彼らをつなげるアクセラレーターがまったくなかった。そこで2011年にマッカーラボを立ち上げ、ギャップを埋めようと考えた。今ではシードステージのベンチャーファンドも手掛けている。ロサンゼルスにはカリフォルニア大学ロサンゼルス校（UCLA）やサンタバーバラ校、さらに南カリフォルニア大学などもあり、毎年ベイエリアよりも多くのエンジニアを送り出している。コーディングできる人材は潤沢にあり、アイデアを持った起業家はどこから来てもいい」

――ロサンゼルスはシリコンバレーを上回れるか。

「シリコンバレーを上回る生態系にする必要はないが、少なくともロサンゼルスだけで完結する生態系にする必要はある。複数のアクセラレーターが競争する環境は必要だ。競争は1社の間違いを他社が覆い隠すように働く。1社だけでは生態系は作れない。競争を通じて全体が素早くゴールにたどり着くようにできる。アクセラレーターのライバルとしてはアンプリファイ LA、シードファンドのライバルではクロスカット・ベンチャーズとフィカ・ベンチャーズがある。マッカーは8年間で20億ドル以上の資産を運用し、90社以上に投資している。ユニコーン2社、評価額2億ドル以上のスタートアップ10社を育てた」

――トランプ政権は移民を制限しようとしている。日本は優秀な移民を受け入れるチャンスか。

「日本はベストのチャンスを逃したと思う。マレーシアや台湾などから日本に住みたいという人は多かった。もっと過去に移民を受け入れていれば、私も米国に来る必要はなかったかもしれない。今ごろマッカーラボは日本にあった可能性もある。もっとも中国は依然として開放的ではないし、日本にも機会はまだあるかもしれない。中国でもスタートアップが盛んになっているが、それは必要だからだ。中国人が世に出ようと思ったら、政治家か起業家しかないが、政治家は世襲化されているし、スタートアップを起こすしかないのだろう。制度ではなく、起業せざるを得ない状況に人々は追い込まれたと私は考えている」

※本稿の作成にあたっては、岡本淳志（早稲田大学商学部）、豊田修矢（慶応義塾大学理工学研究科）の協力を得た。

（本稿に関するお問い合わせ：masashi.uehara@jcer.or.jp）

本稿の無断転載を禁じます。

詳細は総務本部までご照会ください。

公益社団法人 日本経済研究センター
〒100-8066 東京都千代田区大手町1-3-7 日経ビル11F
TEL:03-6256-7710 / FAX:03-6256-7924